不斷光

常恒不斷の光明に
我等が意志は靈化せば
作佛度生の願みもて
聖意現はす身とはなる

不斷光　意志靈化

不斷光の本體は法界周徧にして又人の意志に實現して不斷の靈的活動となる。

斯不斷光と一致せる意志は大菩提心なり。菩提心は高等の道德心にして劣等なる我意感情を制して自由ならしむる意志なり。斯光は善惡を双照し、惡は目的に背くが故に排除し善は如來の目的に隨順するが故に善に進む。之によりて自由意志あり。

不斷光は人の意志に對して心靈を照す。

自己の熟考となり周到緻密の注意は人の意志に現るゝ不斷光なり。人未だ斯光に靈化せず盲動的に意志を活動するが故に貪瞋嫉憎等と發動す。之が爲に終身相復す可からざる讐を作るに至る如きは蓋し不斷に活動する心意の緊密なる注意缺乏すればなり。注意の缺乏したる時に忽ちに感情は逸して專横に盲動す是失敗の原因なり。然れども其根底を探る時は全く平生不斷の意志を統御すべき光なきが故なり。不斷の光が嚴密なる注意として自己を返照せば道德的行爲に於て躓きはせまじきものを。不

斷光の要素たる神聖の光が人の意志を照して、我意罪惡が我を汚して闇黑に誘引する結果の實に恐るべきを先見する事あらば背くまじきものを。

自己の意志を統御すべき心靈は卽ち如來の神聖の光によりて理性の光として自己のすべての精神活動を統御するものなり。常恒不斷に自我の光明昭々として照らし、神聖にして侵す可からざる統治の有るあらば、一個人の政治は能く治まりて常に平和にして鬪諍は有るまじきものを。人の心意は常に不斷に活動し念々生滅して間斷あることなし。外界には心を刺戟して感覺あり又罪惡に誘惑するの機會充滿せり。最も鞏固にして不斷に注意の光を以て不斷に念々を照して之を統べて善道に向はするに非ればはしなくも或は感覺の妄塵に染汚せられ、又は三惡四趣の意志に迷惑して、靈的聖道を失ふの憂なきを保せず。之に對して向上の進路を照すものは不斷光の注意力なり。

人の精神は常恒不斷の活動にして生滅變易常なき心意が一定せる目的に達せんと欲せば其の根底を鞏固にせざる可からず。例へば大厦大建築物を建設せんと欲するには其の表面に現はれざる處の基礎

を堅牢にせざる可らず。人世に立つて一事業を成功せんとすれば必ず其の意志の根底を鞏固にすべし。

然るに人心殆（あやう）し。人の心念は念々に生滅し刹那々々に異變す。自己の意志已上のに其の基礎を立つべし。即ち家屋は建築の地ぎやうを地盤から築き立つる時は傾動の怖なきが如く、人の心意の根底は一大心靈なる如來の常恒不動の大聖意に依つて之を基礎とすべし。如來不斷光の要素たる神聖は眞理にして眞理は永久不動の理性なり。人は自己の心念無常遷流の賴む可からざるを自覺し、又我なるものは自分勝手なれば自己の都合によりて轉變するものなり。己が意に適すれば非理なる事にも是認し己が意に適せざる時には理ある事をも擯斥す。如來は眞理の本なれば、眞理の光明が不斷に自我を照見する事を知る時は、他人の是をも自己の非をも誤りなく知見し、基礎たる如來の神聖の光明に由て自他に對す。又時間的にも人の心意は念々に生滅し今年の我は去年の我に非ず。順境の我逆境の我とを異にし、成功の朝の我と失敗の夕の我は異れる我の觀あり。己を判斷する我と他人を批判する我とは全く同じきにあらざるは蓋し無常遷流の心念たる我なり。此の生滅常なき我を基礎とする時は人心是殆（あやう）しである。然れども此根底なる大我即ち如來の永久不動の眞理より不斷の光明

を以て我意志の基礎とし、此の不斷の光明を意志の根底として我を統御し我を指導し我を判斷し我生命とし我活動とする時は、我益々向上し終局に趣く處必ず至善ならん。

世に偶々偶然にも貧兒より一躍して巨萬の產を作り一世に豪商の名聲を赫々たらしむるあれば、我も亦彼の如くに僥倖を得まほしく希ふものあり。之を羨望し自己もかゝる幸運を得んと希ふは甚だ非なり。

抑も他人の成功は偶然の結果にあらず。人事如何に聊少の事たりとも其の原因なき結果あらじ。苟も一事業に就きて成功せんと欲すれば、必ず其の意志に於て其の目的に向つて不斷の意志力を以て不斷の光と不斷の熟考と不斷の意力を之に注ぐにあらざれば成り難し。

人は意志の散漫、横恣私慾の盲動に結果の實を得る事有らんや。見よ農家の田園雜草恣に蔓繁せば、如何なる沃地たるもかゝる田園に善果を收穫する事あらんや。米果の如く人を稗益する草實は耕耘播種栽培の丹誠なる結果ならざるなし。人苟くも自己の目的を成就し成功して功遂げ名を成すに、

皆不斷の意志力を自己の目的に向つて用ひたる結果ならざるなし。

人の心意は甚だ御し難し。漫りに感覺亦感情の爲に動かされて之に盲動せば何事にか成功の望あらん。不斷の活動と云ふも、目的に向つて光明ある不斷の活動にして、一定の目的に向ひ、之を障礙する處の一切の妨害を排除して、專心無二に一の事業に不斷の意志を注ぎ、此には殆んど名狀す可らざる苦心辛苦萬難を經て始めて之に達すべきものなり。經に「心を一處に制する時は事として辨ぜざるなし」と。他人の成功談を聞き一時の感情の爲に煽動せられて自己の成功を望む如きは成功不可能なり。不斷の意志は決して表面にあらはさずして深き意志の內面に活動する不斷の努力こそやがて一大事業を成功せしむる原因なり。若しくは政治家又は宗教家又は實業家等その何たるを問はず、各其事業の爲　其目的の爲に、不斷の意志專ら此を修め、この目的を達せざればやまずとの大決心を要す。

宗教の靈的意志を成さんが爲には、不斷光の觀念念々に離れず、常恒不斷に心念工夫を凝らし、不斷の修養は自己の意志を靈化するの第一義なり。若し心に間斷ある時は成功しがたし。

未だ光明なき決心は盲動的にして、自ら是と認めたるも、若し不斷光によりて自己を返照する時は、昨日の是は今日の非と明らむ。斯る決心は其結果如何を自問自答して、既往の非を自覺したので自己の決心は動かさざるを得ず。決心は不斷の意志の修練によりて成立し、決心已に立つ時は其決心より發する意志は不斷に其の決心に隨順す。自己の決心は自己の心の常恒にして不斷即ち平生の決心なり。

光明中の決心は闇の意志に破らるゝものにあらず。盲目的意志決定は必ず光明の爲に破らる。意志薄弱なる人は自ら決心する事に躊躇す。自ら決心する事能はざるものは何ぞや。意志の鍛錬未熟なるによる。意志の鍛錬は即ち不斷光なり。此不斷光と一致する意志は鞏固なるが故に眞勇氣なるが故に決心明了なり。決心の自ら判然たると否とは不斷光を得ると否とにあり。他に原因あるなし。意志の不斷光は吾人が運命を左右する原因なり。

意志は常恒不斷の活動的心用とすれば、不識的なると意識的なるに拘らず意志に離れたる心あるこ

となし。故に不斷なり。

此の不斷の意志に盲動と明動とあり。盲動とは不識的意志を云ふにあらず。理性の光明を離れたる意志の活動なり。意志の鍛錬とは意志に不斷の光明を得るにあり。人の品性も人格も此光の光動と盲動との如何による。

たとひ如何によく働くとも私慾肉慾の盲欲の動機によりて働くものは高等なる人格と云ふ事を得べけんや。人格も品性も成功も自治も鍛錬せる意志即ち不斷光的活動の結果に外ならず。人の人格成功等が表面に現るるに就ては其裏面に常恒不斷永へに燃えつゝある意志の光が離る可からず。

不斷の光にして常へに意志に輝く時は、自由自在に之を操縦し其の便宜に隨つて機に臨み變に應じて無碍自在を得べし。

意志の鍛錬即ち精神の光明なるが故に、斯光明加はらんか、如何なる危機に處するも身を誤る如きの虞なし。

此光明は自我が肉慾を支配するが故に、肉我は如何なる危機に際しても身を誤るの恐れなく、又失意の境に立つとも失望落膽の場合にも自ら悲に沈淪する事なく、たとひ艱難辛苦に會ふとも自ら昏迷

して爲すを知らざる如きの愚を演ずる無きに至るは何ぞや。斯光は人の精神の奥なる眞我を喚起し、眞我が能く我を保護し大に慰藉を與へ、又眞我が肉我を指導して常に善道に導く。自己を反省して禍を轉じて福となし、暗中に一道の光を與ふるものは不斷光なり。

意志の鍛錬と云ふことと不斷光に靈化すと云ふことは同一なれども、宗教的に云はば靈化と云ふ。不斷光に益々鍛錬すれば彌々意志の緻密となる。其鍛錬と不斷との精神狀態を物理的に例せば、一切の物質には分子と分子との空隙あり、彼の鐵の如き鑛鐵は至つて其相抱合せる空隙粗大なれども鍛錬して鑛滓を除去するに隨つて益々緻密なり。能く鍛錬したる鐵が名劍と成る如く、之を意志の鍛錬益々進む時は、意志の活動間斷なく光明態となる。其の分子の抱合最も緻密なるは白金黃金等なり。其の密接の度に隨つて又光澤度も强し。人の意志空隙なき光明は其精神道德的光明として神聖侵す可らざる精神態となるなり。

何人も道德意志なきにあらず。然れども横恣散漫にして私慾の爲に塞閉せられて、靈光に間斷の度大なれば、遂に平生精神をして盲動せしめて其の習慣が竟に光明を覆ふ。人に賢と愚と分るゝ所以は、光明的意志の不斷と間斷の度の如何に由るのみ。凡人と雖も光明的意志無きに非ず。然れどもま

ことに間隙ばかりにして忽ちに闇となる。八億念々の中に光明生活は極少時にして餘は盲動なり。賢人は光明に空隙の少なきなり。人格の圓滿と圓滿を缺くと云ふも亦然り。能く意志の鍛錬よく成熟せる人は意志が空間的に空隙なき光明あるものなり。

意志が空間と時間とに於て間斷なき靈光熾然たるものは賢人なり。盲動なるは愚人なり。禪に正念相續と云ふは意志不斷光なれとの義なり。念佛念々不捨離、憶念不斷と云ふも不斷的意志ならしむるためなり。

意志の空間的光明の圓滿とは慈悲、智慧、安忍、克己、剛毅等の諸の道德の完全なるを云ふ。或は智慧あれども慈悲を缺き剛毅なるも忍辱をなすこと能はざる如し。凡ての道德に於て缺乏なきを空間的の間斷なきものと云ふ。

平生是道とは不斷光意志に常に輝きつゝある時平生是道なり。

世に賢人と愚人と、君子と小人との分るゝ所以のものは意志活動の盲動と明動との別なるによる。

人一日一夜八億の念あり。小人と雖も道德的光明の意志の發せざるはなからん。然れども是電光の如く暫時にして忽ちに消失す。八億の念々を常恒に照して太陽の如くなるは、即ち不斷光に由て活動する意志なり。念々常に清澄なる泉の流出するは君子なり。濁水ならば小人なり。

全く不斷光が自己の意志に能動的に發動するに非ざれば眞の不斷光の意志にあらず。例へば他人の德行光輝赫々たるの名譽を稱せらるゝを聞いて、己も亦同じく名譽を貪るが爲に一時感情を起し、又他人の勝れたるを羨んで一時の勉强を急に思ひ立つ如きは決して自己の意志不斷光にあらざるなり。

不斷光は自己の眞髓意志より能動的に活動する義なり。謂ゆる中庸偏よらず。倚ならざるなり。或時は畏敬すべき君子たる如く或時は卑賤すべき小人たる如きは全く意志の統一を缺きたるなり。不斷光無きが故なり。又己が情に適ふ人に對して情に適せざる人に對すると其姿色を異にする如きは、是感情の爲に意志の中庸を奪はれたるものなり。

中庸に、爵祿をも辭すべし白刃をも踏むべし中庸をば能くすべからずと。人は一時の感情にて如何なる名譽をも爵位をも勳賞をも感情興奮せる時は之を辭する事もあるべし。亦白刃石火の下をも敢て恐れざる事もあるべし。然れども此等は唯一時の感情の興奮が動機となりて敢爲せし事なれば是れ平

生の事に非ず。人は平生不斷に冷靜なる意志より活動せるに非ざれば中庸なる事能はず。過不及なき中庸は卽ち不斷光の意志活動なり。意志は中庸なれ。大敵にも恐るゝ勿れ。小敵を侮る勿れ。外界の刺戟の爲に動かさるゝ勿れ。不斷中庸なる意志鍛錬する時は外界の刺戟に對して驚動せられず、誘惑せられず。君子の中庸に安立するは是不斷光の賜なり。

人の心意の勢力は不斷活動なる意志の力なり。能動的に此不斷發動の意力を積累する時は非常の心力を起す。喩へば蒸氣力充實するが如く精神一到何事か成らざらん。不斷意志力の不撓不斷勇猛進趣あらば如何なる事業か成就せざるべきぞ。西哲が「意志力は萬能なり。以て金鐵をも破る可く以て山岳をも動かすに足る可く、以て人心を感激驚動せしむるに足る可し。たとひ天地に隆替あるも意志の力は三軍の力を以て奪ふ事能はず。あらゆる人間社會の動機は一として玆に萠芽せざるものなし」と。意志をして最も不斷密嚴なる力を充實せしめて、一毫の間斷なく金剛の如くに鞏固ならしむる時は、金鐵をも碎くべし。火も燒く事能はず、水も漂す事能はず、刀刃も割く事能はず、とは是意志の

金剛の如くに鞏固になりし時なり。關將軍が一たび怒奮を發して叱咤する時百萬の軍勢一時に破るとは最も不斷の意志が最も牢强に集中したる力なり。軍人が彈雨の中に立て彈丸も能く射る事能はざるは意力の不斷に由りたる功果なり。念力强盛と云ふは同じく意志の不斷に密接したる力なり。

不斷の意志力を一時に集中する時は非常なる力となり、平生不斷に活動しては中庸となり、平生不斷は沈着にして、非常の不斷力は鞏固に凝結して金剛の如く空隙なき故に、非常の場合には非常の意志を凝結し、平生には常恒に空隙なき注意力思慮周到なる意志の力となりて目的の正確を得せしむ。是不斷光の意志に充實すればなり。

人生終局の目的は圓滿なる人格至善に到達するにあり。圓滿なる人格は佛陀是なり。至善の極は極樂是なり。然らば人は何を修して圓滿なる人格佛陀と成り至善なる安寧國に到達する事を得るや。

圓滿なる人格とは最も能く意志の鍛錬意志の光明赫々として間斷なく中正を得る人を聖人と云ふ。人は生れ稟けたる資性天稟にして其の天賦の器相同じからざるにせよ、各自は自己の資性を圓滿に完

全に發達し遺憾なきまで實行して其の天分を全うし全力を盡して已らば足れり。人己が天稟を完全に鍛錬し圓滿に發達し天分を盡す時は佛子たり、菩薩たり。水晶は水晶の性を顯はし金剛石は金剛石たる資性を顯はすべし。强いて水晶を琢磨して金剛石と爲せと云ふの謂にあらず。

世に各自の意志卽ち道德意志を完全に鍛練して其人としての天分を盡したるものは圓滿なる人格なり。

人世に惡人と目せられ惰弱者と名づけらるゝ人にも、精神の奧室には當に光を放たんとする靈性の伏藏するあらん。之を佛性と曰ふ。斯性能を有し乍ら自ら之を開發し光輝を赫々たらしめ光明を活動するの意志なき者は實に是罪人たり。苟も常識を備ふ可き資性ある上は自己の資性を完全に發展し天分を盡すの志なかるべからず。

光明敎會が世人を勸告する事は各自己の伏藏奧室を開發し全力を盡して倒れて止まんとまでの意志を立てよと云ふにあり。是苟も佛性を具備して人間と生れたる第一の本務なり。この人生の本務人間としての天分を盡さずして可ならんや。此本務を盡すの第一要件は意志の奧なる心靈の光明を以て凡ての意志活動を偏邪を去り中正を得て益向上し至善に向ひ其天分を盡すにあり。

斯意志をして目的を達せしむるものは不斷光なり。汝が意志何に對しても不斷光を以て注意せよ、時間的にも不斷に熟考せよ。

不斷光に平生と非常との別あり。平生には不斷光の意志即ち本心の光能く自己の氣質を返照し自己の氣質の偏執を自覺す。此偏執を固守するものは全く鍛練の足らざるものなり。

能く志氣をして偏執して中庸を失ひまた時間的に或時は物に熱中し或時は冷却し心意中庸を得ざるは、未だ鍛練足らず本心の光なく唯形氣の質に一任するが故なり。人心是殆しとは氣質に偏するが故なり。

人形氣の質なるものは若しくは遺傳的に又は習慣の力よりして其の人々の氣質に稟けたるもの各相同じからず。或は貪戾なるあり、又物に凝結せるあり、陽氣なるあり、陰氣なるあり、急性なるあり、緩性なるあり。各自其の偏倚せるありて天性の自己の偏執は自ら弱點たるを自覺して之を陶汰して而して後初めて中庸を得るなり。高等なる人格と爲るべき事を知らず、自己の稟けたる偏執は自己

の氣質に一任する時は、益々偏執の習慣となりて氣質の爲に中庸を失ふ。本心の光明によりて、偏を去り中を得、邪を除き正に復す。此中正を得て平生中庸を得るものは本心の不斷光なり。氣質は偏執あるが故に或事には熱中し或事には冷淡にして自己の氣に適する人をば偏愛し適せざる人をば憎惡す。本心中正を得る時は偏執の失に陷る事なし。中正を得ざるものは圓滿なる人格たる能はず。

不斷光は聖靈が偏邪を去りて中正の意志として不斷に靈的活動し、自己を正し又他を正しうするにあり。

知情意の垢の靈化

智力垢—不正知見
- 身見。果報の上にあらはれたる依身（からだ）を我と計す。
- 邊見。靈魂は斷滅すとかまた常住とか一邊を執す。
- 邪見。因果を撥無す。
- 取見。劣を取して自ら勝と計す。
- 戒見。非因を因と計し非道を道と計す。

心情垢
- 貪慾——
  - 肉慾—眼耳の慾、營養生殖の慾を貪り不攝生放蕩等をなす。
  - 我慾—を張りまた己のみを厚うして他に害を與へることをおもはず我見我愛等なり。
- 瞋　恚——非理又いかり。
- 愚　痴——事理にくらく己が非なるも却て他をうらみ、迷ひ愛すれば惡きをも惡し

と感ぜず。憎めばよきことをよく感ぜず。みな迷なり。

我慢——増上慢、卑下慢等あり。

意志垢

悪意地。非道徳方面に向ふ情操。

我執。主我を主張し世俗幸福主義。

卑劣。世俗情操は卑劣にして主我幸福を貪り高等なる聖靈熊菩提を汚す浮世執着。

世俗的情操といふて人の天然は意志の垢ありて、神の神聖態に適應せぬ悪素質あり。譬へばもと眞金の鑛垢の中にある如く、之を除き去るに非ざれば金性を顯はすこと能はざる如く、如來性が諸の煩惱野卑の垢に覆はれて神靈態を覆ふ。未だ高等なる宗教によりて精練せざるものゝ情操は高尚なる理想もなく神的志節なくまことに野卑なる人間的情操をいづること能はず。

世界的動機即ち娑婆執着は浮世に執着して意志が欲望する處は感覺的欲望にして、或は名譽權威を貪り利を求め榮華を望む等のすべての望み。この現世物質界を超へて目的を心靈界に求め望を神の國

にいたすことを欲せず。況や願作佛心に於てをや。

我執は主我執著なり。人は本能幸福主義なるが故に、之を恣にして生育するときは我慾のみ主張し自に利あらんかぎりは飽までも欲望し、他を安じ衆と利を同ふせんと欲するの志なし。

之等は意志の垢なり。此光によつて天然意志の垢は是皆彌陀の意志に適せざるものとして排除す。之は消極の方面なり。此光によりて從來の天然精神を超越して道德力行をさわるものを除かば自由意志なり。是よりは意志を二面とし自己と彌陀の意志となり。自己は惡の本なるを以て常に自己離脱に自克につとめ、彌陀の意志實現に進むべし。彌陀の意志とは神靈態。この神靈に化せんが爲に常に意を注ぎ靈化すべし。靈化といふも極めて鞏固なる道德に外ならず。

意志の垢卽ち彌陀の神靈態に適せざる惡素質脫却すれば彌陀の神聖同化の意志として鞏固なる道德態となり來る。

意志の垢を排除して靈格を成さんと欲するには勇猛なる意力を以て之を碎礪せざるべからず。譬へば鑛垢を去つて金性を顯はすが如し。天然の自己は鑛垢にして靈態は眞金の如し。世俗情操と世界幸福執着をみな破り利己主義を排除せんが爲めに十二光の聖德に意を注ぎ、この聖光は悉く我等を靈化

せんが爲の光明なれば、この彌陀の觀念を實現せんが爲に欲する願望、この道德的動機の最上衝動を道德的情操とす。この願望、道德的最上衝動は即ち聖靈態菩提心なり。

菩提心とは即ち願往生心なり。願往生心とは願作佛心なり。願作佛心とは願度衆生心なり。是上求菩提下化衆生の心常に彌陀に安立せる精神、彌陀の圓滿なる意志實現として行動し、自己が彌陀に神聖化せられる如く、一切の衆生をも悉く彌陀に攝化同化せられんことを願望し、衆生をして之に同化せしめば神的安寧を得べし。

彌陀の靈化の意志は神聖正義忍辱勇猛一心寂靜謹愼精進智慧等となりて活動す。慈悲正直清潔清簾節操正語溫柔恭儉。等。

圓滿なる至高善は獨阿彌陀尊のみ。彌陀尊の至善は之を知ること能はず。超人間なるを以て之を寫象すること能はざれども、敎祖釋尊の人格は彌陀の意志實現として生活々動せるを以て、之に比例して超人格の統一せる彌陀尊の至善をしるのみ。敎祖は世俗的情操世界的動機主我執着已に脫却して、人格として圓滿、彌陀靈化の意志として生活したまへり。彌陀は主我的幸福を脫して精神的靈福に、一切をして普く安寧ならしむるにあり。

善とは人の惡素質の垢を脱し、充分に精神及び身體の諸能力を發展せしめ、人類を悉く安寧ならしめんとの意志なり。人間最深の機能まで發展せしむる時は、自己に安寧を得るのみならず、他の關係も益々親密ならしめ、人格としての圓滿なる精神生活を得らるゝにあり。

靈化により、世俗情操を聖靈態菩提心に。
世界的（うきよ）動機を上求菩提、願作佛心に。

不斷光の靈化

意志を靈化し、聖菩提心とし、終局目的に協力し、聖意實現する行動。

意志の信仰は實行にあり。即ち回向發願心なり。知力に聖靈を知見し、心情に融合心靈の花開き、意志實行は結果なり。

意志の願望は上如來に冥合し、下衆生と共に安寧を求め、之を實現的に行爲するにあり。

消極的には世俗情操、世界（うきよ）動機、我執幸福の如き天然的我意と、世界に規定せられたる意志は無上菩提に適せざるものとして之を排除す。

積極には我意を聖意に伏し、個人目的を超えて如來の終局目的に參與するにあり。

機制我は因果に規定せられ自然に支配せられ道德自由得ざるのみに非ず、我は罪惡の根本、肉慾我慾これより生じ我の幸福の外に欲望なく個人の外に目的なし。この我意に道德の根據を求むべからず機制我を超えて其最深の根底たる眞我を發見し、眞我に我意を伏し一切の感情意志等を支配せしむ。

眞我は如來の一大眞我の泉源と連絡し、之を無上道心と云ふ。是道德的最高等の衝動卽ち道德的情操この如來の眞我と連絡せる道德的情操より意志卽ち心靈に轉じ實行的信仰となる。人が如來の泉源より自己の心靈に湧き出る聖靈によりて、道德の修養に力行し、我意に對し克己的に聖意實現の菩提心を鞏固にして、意志を靈化す。

靈化は如來の恩寵なり。最深の眞我より信念に湧き出る靈によつて道德練修する時は、我意に屬する煩惱を訓練しついに轉じて菩提と靈化す。心靈は知情意を致一せる靈的精神。心靈は如來の恩寵より啓示の神聖に自律道德を命し、正義としては、我意を服し聖意實現の爲に天賦を果さんと欲す。

無限の恩寵が人の心情には融合安立の靈福を與え、意志には如來の目的に協力して聖意實現に行動す。

如來の恩寵たる啓示にて解脫し靈化したる精神心靈卽ち菩提心なり。

超世俗靈化の心靈は志節高尙に天人欽仰し八部恭敬す。慧遠の志氣高節。空祖の德容溫顏、世の榮辱の爲に一念も動ぜず。導師の勸化。康公の淸節。高く人天を出で善く人間を度す。

道德觀念を實現せんとする一般願望を菩提心と云ひ、また願作佛心、願度衆生心、願往生心、

作佛度生

靈的動機の欲望は願作佛心と願度衆生心となり。願作佛心とは自己の奥底なる法身の分たる靈性發展せられ、報身の心光に靈化せられ、己を圓滿に完成し、現世を通じて永遠の淨土を實現せんとの欲望たり。

願度衆生の望の前には、緣なき衆生は度し難し惡言罵辱も彼を導くの緣とせん、況んや好意を以て己に待するものをや。共に念佛して同生を求め、法喜禪悅の味をわかたん。

一切は同胞なり。共に如來の聖意を體して、慈心を以て相視、同情を以て相念ひ、諸の衆生と共に安寧を得んことを願ふ。之を度生の欲望とす。

不斷光と志操

不斷光は意志を解脱靈化する光、その本質は、神聖正義、金剛智慧態。

惡素質は世俗情操、世界的動機、主我幸福主義、斯の如きの志操は聖靈菩提心に違す。

聖靈菩提心とは願作佛心（神聖靈化の欲望）、度衆生心（法性平等、神の平等の慈悲心を自己の意志として衆生を靈化せんと）、願往生心（眞理の歸する處を知りて、衆生と共に終局目的に、また一切をして最終の靈福の爲に）、との意志の願望なり。

世俗的情操は人情的人倫的志操を第一義とし、高く神聖的に對する志節眞理に對する情操なく、道義の如きはあしからざるも、志操に至つては世俗野卑なるを免るる能はず。無上道の志操は挺然として屈せず、いかなる境遇も此志操を變ずる能はず、人間無上の名譽も威權もこの無上道のためには志節を換ふる能はず。

牟尼修道の途上に王舍城にさしかかる時、頻婆沙羅王この沙門に、吾國位を以て子に與へん、請ふ

之を諾せよと。太子挺然として志節を變ぜず。

無上道の志操は何かは此の靈魂をけがさんとの志操なり。肉體や名譽を以ての人情的情操に非ざるなり。其情操一に無上道を志求し、彌陀に對する情操には命も名譽も何も一として顧ることなき志節なり。

世界的動機は世間的欲望にして、其意志の望む處は感覺的か或は名譽權威なり。かゝる意志を超越して超然として獨り朗かに意志高く天に聳へ無上道を志求す。

意志の發動的なるを以て常に上至尊の聖意の實現を祈つて止まざると同時に、感情にはかの實現の聖旨に對して感謝の感情をすつることなかれ。感情は受動的なるを以て、かの受けつつある恩寵に感謝し奉つるなり。然れども意志が波羅密多としては常恒不斷の進歩に非ざればいかでか發達すべけんや。念々に新に實現し念々に感謝し共に離るべからざるものなり。神聖正義恩寵と一切能とは至尊の聖意と仰ぐべし。

法藏曰、「吾れ誓ふ佛を得んまでに普く斯願を行じて一切の恐懼の爲めに大安を作(な)さん。たとひ佛有りて百千萬億無量にして大聖の數恒沙の如くならむに、一切の斯らの諸佛を供養せんよりは、

道を求めて堅正にして卻（しりそ）かざらんには如かじ。」

（道とは無上道。圓滿完全たる神の意志に靈化すべき道。最殊勝なる動機。）

又「たとへ無量佛土悉く嚴淨にして光明あるも我作佛の國土をして第一ならしめん。其衆奇妙にして道場超絶し、國泥洹の如くにして等双なからん。我當に一切を哀愍し度脱すべし。十方より來生せんもの心悅清淨にしてすでに我國に到りなば快樂安穩ならしめん。」

（人類をして最圓滿に安寧ならしめんとの怖望。宗教及道德倫理の目的ここにあり。是肉慾幸福主義の快樂にあらずして、人類精神の最圓滿に發展し最終の目的なる精神、平等なる至眞至美の靈界を精神に顯したるなり。）

「幸（ねがは）くは佛信明したまへ。是れ我が眞證なり。願を彼れに發こして所欲を力精せん。十方の世尊智慧無碍なり。常に此尊をして我が心行を知らしめん。たとへ身を諸の苦毒の中に止（を）くとも、我が行は精進にして、忍んで終（つい）に悔いざらむ。」

久遠實成の彌陀、人類を攝取し救靈すべき軌轍を顯さんが爲に法藏の應身を示して客體の至尊の聖意を顯はし給ひたるなり。十方世尊智慧無碍とは十方數多の佛在ますが如くなれども實を剋して論ぜ

ば盡十方無碍光の法藏の本佛にして常恒永遠に一切を攝取し救濟するところ。

是らは靈化の意志の模範と見るべきものなり。不斷光の光益としては此の法藏の因地の志願は悉く靈化の意志と相應す。

自己の意斯の如く靈化せしや否を自ら檢すべし。

法然上人の門弟二人罪科せられ、上人の流罪は一向專修興行の故なればとて、門人等歎きて、老いの御身、遼遠の海波に赴き給はば御命安全ならじ。願くは一向專修を停むべき由を奏して此罪を遁れむと、勸めたてまつれば、上人のたまはく、流刑更に恨みとすべからず。精神已に淨土に安住す、此肉何の慮る所あらん。洛陽の化益年久し。邊土に田夫野人をすすめんとの年來の本意を遂ぐ、ひとへに是朝恩なりと。世間の機嫌の爲に佛祖の素意にもとらん。我たとへ死刑に處せらるるとも念佛の弘通の事いはずばあるべからず、との至誠心を見るべし。

世俗的情操は常識的人倫を根據として安立せる情操を云ふ。人道に超越して天を根據とせば宗教的なり。超世俗情操は死生の爲にも神の意志に安立して變ぜざる志操。

孔子が自己を擧げて天に托し自己の爲す所は天之をなさしむと信ず。天德を予に生ず桓魋それ予を

如何せん。天の斯文を喪さざるや匡人それ予を如何せん。

死生の爲めにも神の意志に安立して變せざる志操。

ソクラテス死刑の宣告を受けて後ハーモセニスに告げて曰く、何故汝は世界に於て生活を繼續するよりも此世に別離を告ることを自己にとりて最善なりとする神の命を驚愕なすかと云ひ、從容和平死を見る故郷に歸るが如くなりき。

孔子が非常の時に生死の岸頭に立つ時に常に天を呼び、天に自己を托せること自己の爲すところは自己之を爲すにあらずして天之をなさしむと信ず。

孔子、ソクラテスの天と云ひ、神と云ひ自己を擧げて托すべきものありて之に安立せりと云ひしも、その神なるものが諦に十二の光明をもて衆生に關係せんとの深奥なる意義は未だしらざりしならん。

超世俗情操とは榮辱生命利害の爲にも泰然として動かざる志節情操なり。宇宙の本體に徹照し、萬物の主たる無量光壽に依屬し安立せる情操は、現界を全くしての榮光も以て顧みるに足らざるを認めん。法藏の因位國と王と位を捨て無上道を求めし如き、悉達が無上道を求め志節の堅固なること、淨

飯の恩愛耶輸陀羅及び百千の愛を割つて凉々たる。又正覺の成道に先だちて魔王人天の欲と畏とを以てするも悉達が志節を換へることなし。

國と位と身命を棄て無上道を求め如何なる榮耀も名譽も威力も娛樂も未だ畢竟依とするに足らず。若し人にして高等なる宗教意志なかりせば、其怖望する所、世の威權榮華娛樂名譽等此世界の外にあらざるべし。超然として自己の榮利と生命を犧牲にしても、神につかへこの道のためにたをれんと決定する志氣あるものにあらず。

意志安立の基礎を常識に立つるものは世俗情操にして、常途の人道說にして未だ常識已上に安立の立脚地あるを知らざるなり。孔子の天、ソクラテスの神の如きは未だ宗教としては高等に進化したる明暉なる光明なるやは識る能はず。

世俗の中の出世。伯夷が彼の西山に登つて其薇を採る。暴を以て暴に易ふ。其非を知らず。神晨虞夏忽然として沒したり。我れ安くに適いて歸せん。干嗟徂かん命の衰へたる哉と。伯夷叔齊が淸廉潔白なる志節雪の如し。然れども前途の光明の在るを認めず。故に自己の運命の薄弱を嘆いて死せり。

司馬遷が、伯夷叔齊が潔淸にして餓死し顏回が學を好むも貧にして夭死す。盜跖が暴戾なるも壽。

近世、横行不軌にして專ら忌諱を犯すもの、而も身を終るまで逸樂富厚累世絶へず。或は地を抉つて之をふみ、時ありて然して後に言を出す。行くに徑によらず公正に非ざれば憤を生ぜず。而も禍災に遇へるもの擧げて數ふべからざるなり。予甚だ惑ひぬ。儻くば所謂天道是耶非耶と。

常識を標準として制裁倫理の根基とせるを世俗的情操と云ふ。平々凡々の情操よりは是らに對して天道是耶非耶の嘆を發せざるを得ず。

邪にして惡をなし人倫に反するは獄。我慾にして惡をなし倫理に反すは鬼。理にくらく獸慾にして横行なるは畜。憍慢にして鬪爭を好むは修羅。倫理を全うするは人。高潔にして精神を研き正しきは天。

志氣高潔にして高く物表に出で、眞理の靈界を理想とするものは聲聞。

志操高く塵を出で天眞を自ら認て理想するものは緣覺。

念佛者彌陀を理想とし情操高く彌陀の如く法藏の如くなれ。

無上菩提心

堅固の信心卽ち決定心、決定心卽ち無上々心、卽ち相續心、卽ち淳心、淳心は是憶念なり。金剛心とは卽ち願作佛心、願作佛心とは卽ち度衆生心なり。度衆生心は卽ち是衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむる心なり。

幸福主義を排す。論註に

彼の安樂國土淨土に生ぜんと願ずるものは、必ず無上菩提心を發すなり。若し人無上菩提心を發さずして、唯かの國土の受樂無間なるを聞いて樂の爲の故に生ぜんと願ずるは亦當に往生を得ざるべし。是故に自身住持の樂を求めず、一切衆生の苦を拔かんと欲するが故に。住持樂と云ふは曰く彼の安樂淨土は阿彌陀如來の本願力の爲に住持せられて受樂ひまなきなり。

凡そ回向の名義を釋せば、謂く、己が所集の一切の功德をもて一切衆生に施與して共に佛道に向はしむ。巧方便とは謂く、菩薩願ずらく己が智慧の火をもて一切衆生の煩惱の草木を燒かんと。若し一

衆生として成佛せざることあらば我佛に成らじと。然るに衆生未だ悉く成佛せざるに菩薩已に自から成佛せんは、譬へば火摘をもて一切の草木をつんで燒き盡さしめんとおもふ、草木未だ盡ざるに火摘すでに盡んが如し。其身を後にして他身を先にするを以ての故に方便と名づく。此中に方便と云ふは謂く作願して一切衆生を攝取して與に同じく彼の安樂佛國に生ぜしむ。彼の佛國は即ち是畢竟成佛の直路無上の方便なり。

菩提門と云は菩薩是の如くよく回向成就を知らば即ち能く三種の菩提門相違の法を遠離す。何らか三種。一智慧門に依て自樂を求めず、我心自身に貪著するを遠離せるか故に、その知進守退を智といひ空無我を知るを慧といふ。智慧は眞理、神の意志により主我幸福主義は劣神態なるが故に脫却すべし。智に依るが故に自樂を求めず。慧によるが故に我心自身に貪著するを遠離す。二、慈悲門に依れり。一切衆生の苦を拔いて無安衆生心を遠離す。苦を拔くを慈と云ひ、樂を與ふるを悲と云ふ。三、方便門に依る。一切衆生を憐愍する心なり。自身を供養恭敬する心を遠離するが故に正直を方といふ。外己を便といふ。正直に依が故に一切衆生を憐愍する心を生ず。外己によるが故に自身を供養し恭敬する心を遠離せり。是を三種の菩提門相違の法を遠離すと名づくと。

實　行

意志の信仰を菩提心と爲す。これ實行信仰にして不斷光に靈化せられて阿彌の聖意實現として活動行動す。正に心情に於て阿彌の眞我の中に安立し、平和なる寂靜なる自己の靈福を內面に感ずるも、猶進んで神聖正義にまた恩寵より靈化せる意志として實行を爲すにあらざれば、未だ眞の聖意に協力せしものといふ可らず。此靈化菩提心とはこの阿彌の目的に協つて活動する聖意なり。

消　極　積　極

心情に世界依屬を超えて阿彌の絕對眞我に依屬すると同じく、意志も天然意志の屬性たる方を捨て轉化せざる可からざる方あり。

世俗情操と娑婆執著と利己主我とは菩提心には不適當として捨離せざるべからず。阿彌の目的なる

無上道心として阿彌の個人神的活動するは、消極には一切の無上道を阻害するものを除き、積極には阿彌の理想に活動す。菩提心に、意志の不道德は自制自克によつて脫却し、菩提心は力行によつて增進す。

世俗情操利己主我を離れて、無上道心開展して、墮落の憂なきに至れば卽ち不退轉の無上道心と爲る。卽靈化の意志なり。無上道心と云ふも至高善神智態道德態に外ならず。世間倫理の道德も形式には異なるなきも、其內容の動機に於て異るのみ。

實に能く自己離脫して神的靈化の意志是菩提心と爲る。世間倫理の動機は世俗情操にして野卑、無上道心は高等なり。

天然敎に謂ゆる道德も德そのものは別に異るに非るも唯主義に於て異るのみ。彼は歸する所世間天然を出でず。其情操と動機に於て世俗たるを免れず。唯靑史に記せられるを目的と爲すが如きの主我は程度卑しと謂はざるべからず。天然の人には世俗的情操は所謂人情的道德にして其情操野卑にして其根底の人情を出る能はず。期する處名を後世に貽すと云ふ如きの動機を超えず。道德其もの〻卑しきにあらず、其人の情操が卑賤なるなり。次に聲聞。

次に進んで天然を超越して、世俗動機を出で獨り超然として高く物表に出で、情操高きこと山の如く志節皎潔にして雪の如し、五欲に對して蛇蝎の如きも、消極の一片のみにして自調自度以て他を顧るなし。自ら獨り三界を超えて無爲に到らんが爲に道諦を修するものは聲聞これなり。三界を超え世俗を超たる道情も利己主義にして、絶對阿彌の中に立ちて一切衆生と同じく同一の目的に活動することは未だ曾て夢にも見ざる所、是また大菩提心の甚だ排除すべき情操なり。

次に大乘相宗三乘の菩提心も超然主義にして圓滿なる菩提心道情は立つものに非ざるなり。何となれば相宗は五性相待の上に立てる根底なれば。一佛乘の圓理を〇らず（　　）眞の無上菩提心とは主我を超え世界規定の天然規定を超え、阿彌の中に在つて阿彌の個人として其目的に活動して始めて其の無上道心と爲すべし。主我と幸福主義は大に擯斥すべき道情なり。論註に無上道心發せざれば阿彌國に入る能はず。若し人無上道心を發さずして、但彼國土の受樂無間なるを聞きて樂の爲の故に生ぜんと願ぜば亦當に往生を得ざるなりと。是の如き樂を貪る幸福主義は世界動機の野卑なる道情にして、其意志が阿彌の聖意とは性質が異なることになれば往生を得ざるなり。殊に大に誤謬する處は、天然の幼稚なる意象より、苦樂自己の生理規定と及び主觀にありて、客觀に反

寫することを識らず。主觀は天然の幸福主義にして、客觀のみに快樂を渴望する如きは阿彌の性を去ること遠し。先づ自己の主我と幸福主義、此動物的生活の慾情動物祖先の世襲的情欲を打破して、理性的精神的道情を發達せしむるなり、阿彌の理性を以てすべて全精神生活を統括するに至るべし。

人心道心の中、人心なる人的情操を打破して、勇を奮ひ意志を鞏固にして道德的力行の修練より益精修して、阿彌理想を實現せんとの神的欲望より、漸次に修習終に鞏固たる性格が阿彌の聖意の個人現たる道德最上衝動にして之を無上菩提と名づく。完全圓滿なる道德情操にしてあらゆる道德情操の最高等に住す。

此道德的情操は表面は個人の如くなるも、其內面は絕對無上道意と致一し、形而上論の無碍光の個人活動に外ならず。

無上菩提心

無上道意とは阿彌の一切慧にして、個人に實現して人の發菩提心と爲る。內面致一の故に、此道意より阿彌の內容に向つては益々其目的に無限の進歩せんと欲望するは上求菩提といひ、一切の衆生は阿彌の理性たるを自ら意識せずして自ら惑ふて沈淪せんとするを種々方便をもて自己と同じく阿彌の內容に歸入せしめんと欲するを下化衆生と云ふ。論註に此無上道心即ち是願作佛心なり願作佛心即是度衆生心、度衆生心即ち衆生を攝取し有佛の國土に生ぜしむる心なり。是故に安樂に生ぜんと欲する者は要ず無上道心を發すべしと。願作佛心とは上阿彌の目的に協力し、度衆生とは阿彌の理性內の衆生を悉く阿彌內容に開展して歸入せしめるなり。有佛の國土に生ずると云ふも身死して後入と云ふに非ず意志の轉依を生とす。論註に人よく阿彌の法身を意識すれば世界の衆生は虛妄なることを識る。しかれば衆生は理性ありながら妄の方面のみに迷ふ、哀むべし。依て慈悲が生ず。又眞實の法身即ち理性を知れば眞實に阿彌に歸依が起る衆生の虛妄を知れば慈悲が起る。一方には歸依が起るに依て上

に歸依し。下に慈悲ある故に方便回向を爲す。菩薩は阿彌の聖意たる一切の功德を施すも自身利己幸福主義に非ずして、聖意實現として、一切衆生の惡素質を拔いて自己と同じく阿彌中に開展して歸趣せしめんことを欲望す。彼の國土の樂を聞きて自己快樂主義は阿彌に入る能はず。阿彌の理性に協ふて一切衆生と同じ終局に歸せんと欲して一切の集むる所の功德を一切と共に佛道に向ふなり。

方便とは菩薩願望す、己の智慧の火卽ち阿彌の慧、恩寵開展を以て一切の衆生の煩惱の草木を燒かんに、若し一衆生として成佛せざるあらば我作佛せず。

然らば衆生未だ悉く成佛せざるに菩薩己に成佛するは、卽ち火○を以て草木を燒て悉く燒盡さんと思ふに草木未だに盡さるゝに○已に盡るが如く、其身を後にする身に先だつが如し。故に行方便と名づく。今曰く。火○は菩薩なり、火は阿彌の慧法界に徧して、觸るるものとして信機開展して惑亡せざるなし。方便とは一切衆生を攝取して共に阿彌國に更生せしめんと願望す。

遠離三種一智慧門に依て自樂を求めず我心の自身に貪著する意象を捨てよ。知に依つて幸福主義は眞理に非ざるを知り求めず。慧に依て主我を捨つ。

二、慈悲門、一切衆生の苦を拔て衆生を安んずる心なきを遠離せよ。慈に依て衆生の苦を拔き悲によつて衆生を安んずる無き心を離る。

三、方便門、一切を憐まぬ心と自身を供養し恭敬する心を遠離す。

已上約して云はゞ幸福主義と主我執とは聖意に適せざる故に脫せよ。また一切に於て神的同情ならざるべからず。

この三種は消極の方にて積極の方は三種隨順菩提門

一、無染清淨心、自樂を求めず菩提の無染清淨心に神的活動す。

二、安清淨心、一切の拔苦を以て、菩提は一切衆生最終安寧の處、一切の苦を拔いて阿彌安寧に攝取せしめざるべからず。若し之を作さざれば菩提に違す、之を作すが故に順ずるなり。

三、樂清淨心、一切をして菩提を得せしむるを以ての故に衆生を攝取して阿彌に歸入せしむるが故に。菩提は是畢竟常樂の處。若し衆生をして畢竟常樂得せしめざれば卽ち菩提に違ふ。畢竟安樂を得るは大乘門に依る、卽ち安樂佛土是なり。又攝取衆生彼國土故に。之を三種隨順菩提門を名づく。

智慧と慈悲卽ち解脫方便の致一。

智慧とは佛智見啓示によりて、自己を解脱して眞我の中に融合して、佛の慈悲と致一し、解脱によりて天然の主我と幸福主義を超越したり。唯解脱のみにて之に安んぜば幸福主義たるを免れず。之より進んで阿彌の目的に活動すべき天職を果さゞる可らず。然れども啓示によるにあらざれば知見の眼なくして菩提の正道いかにして進むことを得べけん。自ら未だ解脱せざれば天然の若惱を解脱すべき理性あるを識らざればいかにしてまた他に普及する意志を發することあらん。解脱して初めて聖意實現として行動し他をも自己と同じく攝化せらるべきことを知りてまた他に及ぼす。

註に、知見と慈悲と方便との三は般若を攝取す。般若は方便を攝取す。般若は如に達する慧。方便は權に通ずる知の稱なり。如に達すとは內面に阿彌に致一し、權に通ずとは客觀の衆生の機を省み、備に應じて無碍なり。然れば卽ち智慧と方便とは相緣て動し相緣て靜なり。智慧は衝動より方便して衆生を度すために活動す。智慧なくば度生の道德衝動もあるなし。亦智と方便と相緣て靜なり。たとへば表面には神的活動止まざるも、內面には阿彌の中に安住して寂靜として照る。故にいか程神的活

動はげしくも內面の寂靜を失はず。同時にたとへ阿彌の常寂光土に安住するも、外に聖意實現の活動を廢せず。故に般若と方便とを失はずと。悉く是阿彌の主觀客觀兩界の顯現に外ならず。般若と方便とに依らざれば菩薩の德成就することなし。若し智慧なく卽ち啓示によつて阿彌の內容に歸せざれば卽ち轉倒に墮せん、天然の主我幸福に墮す。若し方便なくして、阿彌の內面致一に解脫せば、卽ち實際を證するも單に解脫に安んじて幸福主義に墮落すべし。是故に應に知るべし遠離我心貪着自身と無安衆生心と恭敬自身心とを遠離すべし。主我幸福利己は菩提心を障ふ。世間に障碍の相多し。風は靜を障へ水は火を障へ五逆十惡は人天を障へ四倒は聲聞果を障へ、此三種は菩提心を障ふ。

無染淸淨心、安淸淨心、樂淸淨心。此の三心を致一して妙樂勝眞心を成就す。樂に三種の中、法樂卽ち智慧所出樂なり。之佛の功德を愛するより起れり。前三心淸淨にして增進するを妙樂勝眞心と爲す。妙とは內容佛と致一の故に、勝とは三界の樂に勝出す。眞とは虛僞ならず顚倒ならず。乃〇此四種功德によりて阿彌の中に轉生す。菩薩五種法門隨順して隨意自在成就す。所謂身と口と意と智と方便。智業は隨順法門の故に隨意自在なり。此五種功德能く淨土に生す。出沒自在。

回向に二種。主觀客觀の二種あり。主觀は自己阿彌の終局目的に活動するは向上門卽ち往相なり。

次に客觀界に神的活動して菩提の行爲他を攝化するは還相また向下門と云ふ利他なり。謂ゆる大慈悲を以て一切苦惱の衆生を觀察して生死の煩惱の林に回〇し遊戯神通悉く阿彌の實現として衆生を化す之を還相と名づく。

無上菩提卽阿彌目的は世界に偏在して一切を終局に攝化せしむる性能力なれば人がこの大勢力に致一するを發菩提心と名づく。この無上道態は絶對なれば一切衆生も同一の理性が最深に具有す。依て自己の如く一切をして悉く攝化せしめんが爲に方便活動するを利他と名づく。自利利他とも同一阿彌の性能の主觀客觀の兩界に實現したるに外ならず。

故に註に、無上道とは此道理を窮め性を盡して更に過るものなし。正は聖智法相なり。法相無相の故に聖知は無智なり。亦正偏智とも云ふ。一、聖知、偏く一切の法を知る。二、法身、偏く法界に偏し若しは身若しは心偏せざる處なし。道とは無碍道なり。經に云く、十方無碍にして一道より生死を出づと。一道とは無碍道。

無上菩提心とは、約して云へば消極には天然の主我と幸福卽ち快樂主義は人情的にして情操野卑なれば金に鑛垢ある如し。人の天然人情的垢質を除きて超然たる高尙の理想となる。また聲聞主義とは

天然を超えたるも消極的にして利己主義。阿彌の偏眞に歸入して、聖意實現の勢能を知らず。次に超然主義の菩薩は時間的に阿彌を遠く三祇の後にあらざれば致一せず、又は空間的十萬億土を經ざれば融合する能はず。況んや其實現的活動をや。

今圓具教では、絶對阿彌の一切智能の性能中の衆生なれば、天然の主我及すべてに適せざる垢質脱却すれば、即ち阿彌の理性より聖意實現として目的中に活動し、自己のみならず、同一理性の阿彌の個々なれば、自他の差別なく同じ慈悲を以て、自己の阿彌彼を照し彼の阿彌是を誘ひ、主客同一の大道態終局絶對に歸入す。然れども其本體は無窮に常に活動する無上道態なり。

清淨光　歡喜光　智慧光　不斷光

終

目次

清浄光

頁

光明は見えねども觸る……三
清浄光……四
人格改造の光……七
人は改造すべき精神的生物……一〇
光明の要と能……一一
清浄光……一二
如來の恩寵と人の信仰……一七
清浄光と五眼……二〇
宗教の美的儀禮……二三
清浄光……二四
感覺界は感覺の所現……二六
清浄光……三〇
姿色清浄……三三
姿色と血液……三三
呼吸と姿色……三五
姿色と分泌……三六
ホルモンと精神の關係……三八
緊張と弛緩……四〇
分泌液と精神……四三
精神と食物……四五
姿色と交感神經內分泌……四六
生理の不快感輕減……四八
精神統一生理は三昧を有利にす……四九
三昧統一……五〇
三昧練習……五一
住神一境……五二
清浄光の感覺靈化……五三
五眼……五五

清淨光……六二

歡喜光……六九

歡喜光……七一
苦と惡……七三
如來の恩寵によつて解脫す……七四
投合せし人の心情……七五
神人交感……七六
感情的信仰……七八
煩惱……八一
苦毒と煩惱との關係……八三
自ら苦悶す……八四
阿彌に依つて解脫……八五
法喜禪悅……八八
法喜……九一
禪悅……九四

歸命融合安立……九五
人生の幸不幸と歡喜光……一〇〇

歡喜光……一〇三

智慧光……一〇五

人生の歸趣……一〇七
智力的信仰轉迷開悟……一〇七
無明煩惱と解脫の光……一〇八
神人交感の境……一一〇
啓示……一一一
三種の啓示……一一五
開示悟入……一一七
佛知見啓示……一二〇
正因佛性……一二一
緣因卽ち啓示材料……一二二
啓示の眞否……一二四

大乘佛教は啓示……一二六
啓示に種々あり……一二七
智慧光—智力的信仰……一三〇
啓示の眞理……一三八
啓示の表相……一四〇
不斷光……一四五
不斷光—意志靈化……一四七
知情意の垢の靈化……一六二
不斷光の靈化……一六七
作佛度生……一六九
不斷光と志操……一七〇
無上菩提心……一七七
實行……一七九
消極積極……一七九
無上菩提心……一八三

清淨歡喜智慧不斷光

終

辨榮聖者畧傳

編者謹誌

大ミオヤの無盡の大悲に催ほされて、此の土に輝き出で給ひし辨榮聖者は、安政六年二月二十日下總國鷲の谷の念佛者山崎嘉平氏の長男に生を受け給ふ。家に在りて農事に勵み學業を好むこと世の常ならず、十二歳の時彌陀三尊を空中に想見して憧憬の念に堪へず、竟に明治十二年二十一歳にして出家の素志を遂げ、近村東漸寺の碩學大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雜用に學問に忙しく、貫くに念佛一行晝夜斷え間なく、或時は手の平に油を入れ之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して佛前に供へ、以てその忍力佛道修行に堪へ得るやを試し給ふ。東京に遊學して卍山上人に就きて華嚴を修めし央ばには法界觀の三昧圓かに現前し、明治十五年筑波山に籠りて至心念佛の曉には見佛三昧了々と發得し給ふ。爾來一擧一動全く佛法に相應し、施、戒、忍、進、禪、慧、缺くることなく、大康

上人の意を繼いで五香に新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廢家に夜も燈無ければ線香の火を賴りに聖畫を描き、嚴寒にも重ね着せず藁を積んで蒲團となし、超然として勇猛に稱名し給ふ。建立寄附も一人一厘の結緣として遠近を行脚中若し貧窮者に遇へば月日重ねて喜捨を積みし金米全部之に施して更に又一厘より勸進を始め給ふ。途を踏むに蟻は勿論若草までも懇ろに之を避け、大康上人の訃音に接しては即座に追恩別行に入つて不臥念佛一百日に及び給ふ。更に一切經讀了。明治廿七八年印度に渡りて大聖釋尊の御蹟を巡拜し、歸朝しては東西に巡教し阿彌陀經圖繪を施し給ふこと廿五萬餘部、普く米粒名號を施してかりにも一聲稱名の緣を結び給ふこと實に無數、難化の有緣一人の爲にも數年方便して猶措かず、寺の禮遇を辭り態々下男室に夜を明して勸化の緣を求め、夜寒の町に貧者を訪れては當日供養をうけし下着を脫ぎ與へて如來の大悲を喜びあひ給ふ。日毎夜毎の傳道に疲れし色もなく忙中に僅の閑を得ては如來の尊像教化の御文に筆を

運び、汗血のにじむ慈悲の雫が幾千枚、その奉謝の金は悉く會堂の創建となり學園の創立となり數萬の文書數十萬の禮拜儀の施本に充て給ふ。食卓の上浴室の中至る所皆說法の道場にて、一所不住の年中巡教極寒極熱一日の休養もなき間に宿所の緣に隨つては古今の書籍近代科學に至るまで孜々として研め給ひ、又畫、歌、音樂、五筆の書等諸技悉く利生の方便ならざるなし。靈應內に滿ちて、念々不捨寢息まで自ら稱名する程なりし間にも說法に非れば讀書、讀書に非れば書き物、實に一寸の光陰も爲すこと無くして過し給ふことなく、集る淨財は悉く利他の用に供へて反古紙一枚をも節約してその裏に原稿を書き給ふ。一切の時一切の處、たゞこれ佛作佛行、寸隙なきその御行狀に接しては始め尊大に構へし人も皆恭敬して其の教に額かざるなく、諸宗は勿論耶蘇教の牧師に至るまで發心してその門に入る。首唱し給ふ光明主義の光萬民に被る所、念佛三昧各地に盛に行はれ入信の行者幾萬皆悉く値遇の御恩を感泣して盡未來際の願行に奮ひ立つ。超えて大正九年吹雪に更くる北越

の夜寒身に沁む勸化の旅に老いの御聲に盡きぬ如來の御慈悲を傳へて最後の三昧會を木枯悲しき柏崎に導かれ給ひし十二月四日遷化し給ふ。

仰ぎ惟れば內證甚深く外用亦廣大に、全分度生の無我の力が無作の精進に顯れ給ふ辨榮聖者の御一生は、如來光明のさながらの反映に在せば、誰か大慈悲の靈應を仰がざらむ。誰か光明の攝化を信ぜざらむ。

聖者清淨光歡喜光智慧光不斷光
昭和三十五年十月二十一日發行
編輯兼發行人東京都港區芝白金
今里町八十二番地寓居田中木叉
印刷人東京都千代田區神田神保
町三ノ一〇番地春山治部左衞門

非賣品

發行所　東京都港區芝白金今里町八二
　　ミオヤのひかり苑
取次所　兵庫縣蘆屋市六麓莊町四三
　　光明會本部聖堂

辨栄聖者御入滅七十周年　記念出版

仏陀禅那弁栄聖者御著
光明大系『炎王光・清浄光・歓喜光・智慧光・不断光』

平成二年七月四日　復刊

編　者　田中木叉

発行者　光明会本部

発行所　光明会本部
〒659　兵庫県芦屋市六麓荘町二〇-二〇
電話　〇七九七-22-四九〇一番
振替　神戸　二-六四番

印刷所　東進印刷工芸株式会社

辨栄聖者御入滅七十周年　記念出版

――御遺稿集刊行目録――

ミオヤの光　四冊一セット　〔既　刊〕

光明大系

無量光寿　〔既　刊〕

不断光　附　仏法物語　〔既　刊〕

無邊光　〔復刻版〕

無礙光・無對光（合本）　〔復刻版〕

炎王光・清淨光・歡喜光・智慧光・不断光（合本）　〔復刻版〕

難思光・無称光・超日月光　〔復刻版〕

人生の帰趣　〔復刻版〕

光明の生活　〔復刻版〕

道詠集　〔復刻版〕

お慈悲のたより　上巻　〔復刻版〕

お慈悲のたより　中・下巻（合本）　〔復刻版〕